

第14回：産業革命と大戦景気

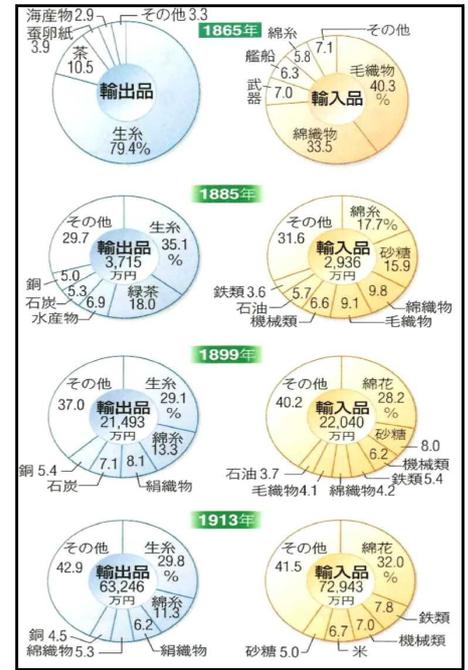
I、はじめに～グラフから見える明治の経済～

(1)輸出入品目、8枚の円グラフ

- ①貿易総額の急速な増加
- ②「絹」と「綿」に注目する＝輸出トップの生糸と「綿」の文字工業製品＝綿織物の輸入国から、工業製品＝綿糸の輸出国へ
- ③他の工業製品や工業原料に注目する
機械類や鉄類を輸出、銅や石炭など工業原料を輸出

(2)グラフから見える近代日本・経済の特徴

- ①急速な貿易の伸展 ②有力な輸出産業＝「生糸」の存在と成長
- ③輸入代替産業の成長 ④製糸業と綿紡績業中心の日本経済



II、産業革命の開始とその特徴～近代経済の基礎条件

(1) 経済発展の基礎条件

- ①背景として、江戸時代とくに後期の経済発展と蓄積
→とはいえ、当時の欧米先進工業国から未熟
- ②開港＝不平等条約下の自由貿易強要＝国内経済の急激な変化
1)輸出産業の急速な発展(製糸) 2)在来産業の解体(綿花など)
3)輸入代替産業の発展(綿紡績・綿織物など)
- ③政府による産業育成政策(「殖産興業」政策)
1)財政・租税・通貨・教育などの産業基盤整備
2)模範工場・インフラ整備 3)政商保護
- ④「不平等条約」という制約条件

(2)1880年代の変化～松方デフレと寄生地主制の形成

- ①官営事業払い下げ＝政府主導の工業化から民間主導・政商主導に
- ②銀本位制の確立・日本銀行の設立⇒国際的信用の拡大、貿易の安定
- ③農村の窮乏…地租・借金を支払えない農民の急増
⇒小作農の増加と都市への流出
- ④豪農の(寄生)地主化

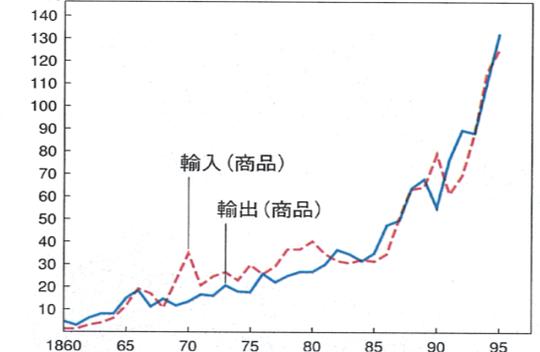
(3)産業革命の開始～製糸・綿工業・軍需の三本柱

- ①画期としての大阪紡績の成功(1882・M15)
- ②民間企業の活発化、華士族・地主・大商人の資金流入
- ③銀本位制の確立にともなう貿易の活発化
- ④松方デフレ⇒安価な労働力の創出

(4)日本産業革命の後発的特質

- ①政府による財閥系企業に対する保護・育成の下で進行。
- ②先発資本主義国の技術水準を移植・模倣・折衷する「後発性利益」
- ③特定分野(鉄道・紡績業・鉄工業・軍需工業など)に偏在。波及的展開に欠ける。
⇒多くの部門で旧来の生産形態が残り、農業もたち遅れた。
- ④政府主導による国家資本・銀行資本・株式資本の動員⇒独占の早期的形成を促す。

1, 品目別の輸出入の割合



102 日本の貿易収支の動向

2, 日本の貿易収支の動向

III、日本の産業革命の諸相

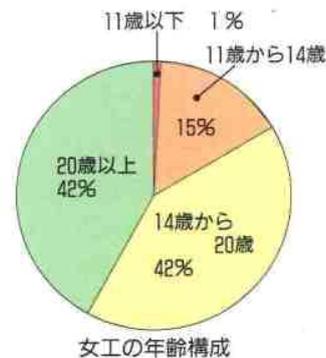
(1)製糸業、養蚕業・絹織物業⇒純国産の産業＝輸出分はすべて貿易黒字となる。

- ①養蚕業…農家の副業として全国に拡大、農村を支える。
- ②製糸業…中小工場中心、貧農の子女を低賃金無権利で雇用→多くをアメリカなどに輸出
- ③絹織物業…生糸をもとに絹織物を生産、国内富裕層向けと、羽二重など輸出向け

(2)製糸業の様相

- ①器械製糸…国産の道具を用いるマニファクチュア(工業制手工業)、手工的熟練に依存

- ②小資本(女工100人以下)の中小企業が中心
- ③発展の理由…1)地銀・売込商による資金供給
2)農家出身の女工の低賃金労働
3)農家からの低価格での原料繭買付=価格の変動を農家に
4)品質向上の課題…女工同士の競争や農民へ転嫁(繭の改良)



(3)綿工業の発展=大規模工場設立

- ①輸入代替産業として発達
- ②1882大阪紡績=一万錘以上の最新鋭機を使用・大規模工場
→24時間、二交代制のフル操業=低賃金長時間労働で利益を上げる
- ③生産高・輸出額の急激な拡大⇒輸入代替産業から輸出産業へ
朝鮮市場→しだいに中国・東南アジアなどアジア市場へ
- ④外国産の綿花を使用⇒国内の綿花栽培の壊滅、大量の綿花輸入
※綿工業の発展は輸入増につながる=外貨流出と表裏一体
(=日本貿易の構造的な問題に)

3, 女工の年齢構成(大阪紡績1897)



(4) 日本産業革命の担い手=女工たち

- ①未成年の少女中心…貧農子女、農家の家計補充・口減らしの面も
「うちが貧乏で、十二の時に、売られてきました、この会社」
- ②長時間労働…12時間以上
- ③劣悪な労働生活環境…高温多湿、綿くず、労災
「工場は地獄、主任は鬼で、回る運転、火の車」
- ④寄宿舎での隔離され監視された生活…布団の共有も。
「籠の鳥より、監獄よりも、寄宿暮らしはなお辛い」
- ⑤大量の離職・逃亡者・健康破壊…脚気や結核が蔓延
- ⑥日本初のストライキ…1886山梨・雨宮製糸
「女工女工と軽蔑するな、女工は会社の千両箱」

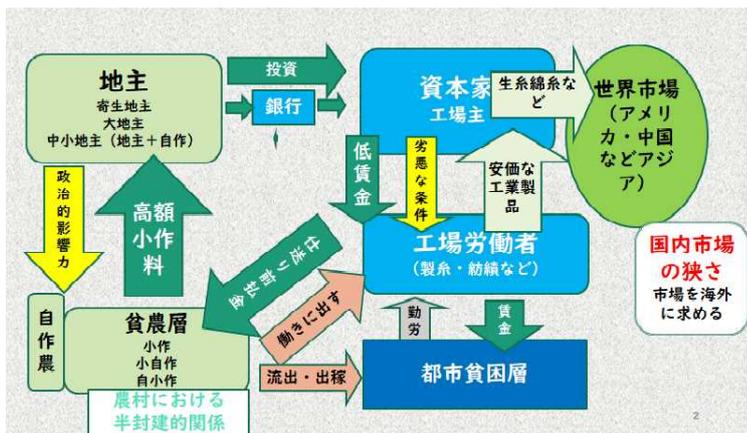
4, 製糸女工の勤務状況

(5) 軍需産業=日本の軍国主義化とくに日清・日露両戦争で発展

- ①砲兵工廠・海軍工廠…国営軍事工場、大砲や弾薬・艦船などを製造
洋式技術の「移植→模倣→定着」。輸入代替産業ただし世界レベルである必要。
- ②海軍工廠・造船所など…1905年以降、世界水準に(軍艦の国産化へ)
長崎造船所など…払い下げを受ける形で成立、軍の委託を受け艦船なども製造
- ③成長に伴い製鉄業・機械工業の発展を牽引 ⇒技術者・職工OBら、下請け・関連企業創設

(6) 重工業とくに製鉄業=軍事関連中心に追隨的に形成

- ①釜石中製鉄所の成功
- ②1900官営八幡製鉄所、操業開始
⇒1908生産目標額達成に
・日清戦争の賠償金などが原資
・ドイツ技術の導入+釜石の経験
・中国の原料(大冶鉄山・撫順炭鉱)



(7) 鉱山・炭鉱業

- ①1880~払い下げで政商・財閥の経営に
→1913年にはほぼ大企業の支配下に
- ②銅と石炭が中心→主要な輸出産業に
- ③労働災害の頻発…落盤・ガス爆発など
- ④前近代的な労働環境=飯場制・納屋制
- ⑤公害問題の発生=足尾鉱毒問題など

(8) 産業革命期の経済構造~ある説明

(9) 工業化を支えた農村

5, 「講座派」による経済構造の説明の模式化

IV、大戦景気~農業国から工業国へ~第一次世界大戦(1914~18)の発生

(1) 「欧州の大禍乱は大正新時代の天佑」(井上馨)

- ①主戦場はヨーロッパ大陸→軍事行動も、人的・物的負担も軽微
- ②戦時需要に対応し輸出拡大、未曾有の好況に→大戦景気の発生

- ③ 税込増→国際収支と財政の「双子の赤字」が解消
→軍備拡張に対する財政上の制約の消滅
- ④ 国内の政治的対立、沈静化に
- ⑤ 列強の間隙をぬい、中国への勢力拡大をはかる
→二十一か条要求＝中国民族運動

(2) 輸入の停止＝ヨーロッパ製品が来なくなる。

- ① 大戦不況 1914下半年期：輸出25～30%減（対前半期）
- ② 国内での輸入代替産業の発達（「まがいものでも売れる」）
- ③ アジア諸国・ロシアなどでも物不足⇒各地で代替需要発生

(3) 輸出の拡大＝日本の製品が世界に輸出される

- ① ヨーロッパへの輸出＝軍需物資や金属⇒重工業・鉱山業の発展
- ② アジア諸国への輸出拡大・原料輸入⇒綿工業の発展・綿花輸入
- ③ アメリカの好景気⇒絹製品などへの需要＝製糸業などの拡大
- ④ 貿易の活発化＝海運業や造船業の隆盛

(4) 大戦景気の発生

- ① 商品価格の急騰＝物価：開戦前の2倍、鋼材8倍、化学製品10倍
- ② 企業の高い収益 綿紡績：資本金利益率10倍超（他も30～60%）
- ③ 投資熱…株式市場などへの資金流入
- ④ 積極的な企業経営者の出現
＝重化学工業など新たな産業分野へ進出（鈴木商店）

(5) 海運業・造船業の隆盛＝「船成金」の出現

⇒船舶運賃の高騰⇒物価へ転嫁、国民生活を圧迫

(6) 「成金」の時代＝薬成金・鉄成金・船成金など

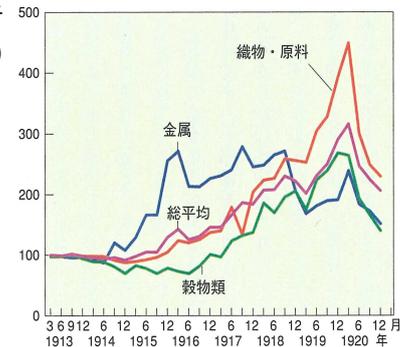
- ① 「成金」の登場
- ② 投機ブーム＝株式や商品先物市場などに
- ③ 熟練工への需要の高まり＝「成金職工」も

(7) 企業の新設・拡張ブーム

- ① 好景気を背景に積極的な投資＝バブル経済化
- ② 他方で国内で代替できない、不足する物資の存在⇒紡績機・発電機、大量・高品質の鉄鋼や金属
- ③ アメリカの参戦⇒鉄・機械を輸出禁止に＝「鉄飢饉」の発生
- ④ 施設設備の更新困難⇒需要増を雇用拡大や労働強化で乗り切る⇒生産性の悪さ＋労働環境の悪さ
- ⑤ 発電力不足による操業困難の発生
- ⑥ 事業拡大や設備投資の困難⇒余剰資金を株や商品先物市場などに投入（投機ブームの背景）
- ⑦ 戦争終了後の大量投資＝過剰投資に



6, 貿易の推移



7, 物価指数の推移

V、大戦景気を変えた日本～工業中心・都市中心の社会に

(1) 農業国から工業国に

- ① 生産総額の急増＝五年間で4倍増
- ② 過半数を工業が、農業は1/3強程度に
⇒農業中心から工業中心の産業構造に
- ③ 重化学工業化 28%⇒32%に
- ④ 動力革命…蒸気機関から電気エネルギーへ

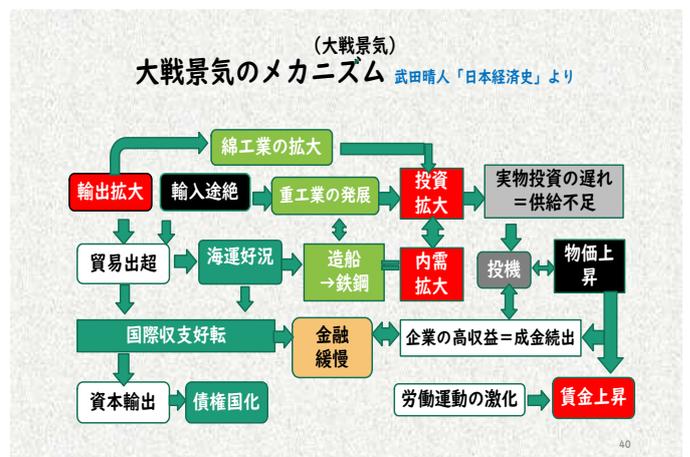
(2) 労働者階級の変化

女工・職工⇒男子・熟練労働者へ

- ① 鉱工業労働者の急増 約100万人⇒150万人へ
労働力需要の高まり・賃金上昇
⇒都市雑業層の減少・農村滞留層の都市へ移動
⇒都市暴動の基盤喪失 →農村の労賃の上昇
- ② 大工場・男子熟練労働者の増加
- ③ 大企業と、中小零細企業との格差拡大
⇒産業の二重構造へ

(3) 都市中心の社会へ

- ① 労働者（とくに男子・熟練工）、ホワイトカラー労働者（サラリーマン）、学生などの若者
- ② 都市型社会の到来…新しい生活様式の導入、電気、郊外型住宅



8, 大戦景気のマカニズム（武田晴人による）

③ 学歴社会の本格化…大学など高等教育機関の増加、知識人の広がり

(4) 都市の風景、鉄道と膨張する大阪

(5) 日本政治の変化 = 「双子の赤字」の解消と軍事費の増大

- ① 貿易収支と財政の「双子の赤字」解消
- ② 貿易の好調、対外投資の増加⇒債務国から債権国へ
- ③ 税込増…所得税・法人税中心に（税込での工業国化・都市化）
- ④ 政府…軍拡と積極財政（鉄道建設・高等教育）の実施

(5) おきざりにされる農民たち

- ① 米価の高騰⇒地主は莫大な収入を獲得にもかかわらず農民に還元されない
- ② 収益目的の土地投機発生⇒寄生地主数が最高に
- ③ 不満の高まり = 小作料引き下げ運動発生
…高額小作料の問題を客観視

(6) 見逃される歴史 スペイン風邪(1918~9)の猛威



9, 大戦前後の経済構造の変化

VI、おわりに～1920年の社会～不況？高度成長？

(1) 大戦景気が生んだ日本のゆがみ（「温室の中の経済繁栄」）

- ① 大戦景気 = ヨーロッパ退場によるバブル
→ 過剰生産・設備投資・雇用拡大、大量の起業の発生
→ 「投機の流行」・「成金」の発生 = 長期見通しの不在
- ② 日本の技術の水準の低さ
→ 需要増に雇用拡大や労働強化で対応 = 生産性の低さ
- ③ インフレの発生 = 物価（とくに米価）騰貴と賃金上昇の遅れ
⇒ 米騒動の発生 → 実質賃金上昇へ
- ④ さらに終戦後の急速で割高な事業拡張・積極財政
- ⑤ 1920/3/15戦後恐慌の発生
= 生産性の低さ・大量の負債・賃金負担 ⇒ 「不況」に突入

| 順位 | 1914 | 1919 | 1929 |
|----|---------|----------|----------|
| 1 | 綿糸 204 | 生糸 780 | 生糸 795 |
| 2 | 生糸 158 | 綿糸 763 | 鉄道 750 |
| 3 | 鉄道 152 | 小幡織物 453 | 綿糸 678 |
| 4 | 軍工廠 149 | 石炭 442 | 電力 658 |
| 5 | 小幡織物 92 | 鉄道 401 | 広幡織物 526 |
| 6 | 石炭 80 | 小幡織物 397 | 鉄鋼 378 |
| 7 | 清酒 70 | 海運 378 | 清酒 301 |
| 8 | 鉄鋼 69 | 鉄鋼 372 | 石炭 245 |
| 9 | 非鉄金属 64 | 軍工廠 315 | 軍工廠 208 |
| 10 | 電力 57 | 船舶 312 | 製紙 190 |
| 11 | 小幡織物 52 | 広幡織物 312 | 印刷 186 |
| 12 | 製糖 49 | 清酒 240 | 毛織物 176 |
| 13 | 原動機 29 | 電力 183 | 製糖 158 |
| 14 | 製紙 29 | 製紙 151 | 小麦粉 146 |
| 15 | 毛織物 28 | 毛織物 122 | 肥料 132 |
| 16 | 印刷 26 | 肥料 111 | 広幡織物 130 |
| 17 | 小麦粉 25 | 製糖 104 | 工業薬品 115 |
| 18 | 肥料 25 | 燃糸 101 | 製材 112 |
| 19 | 広幡織物 20 | 非鉄金属 98 | 非鉄金属 102 |

10, 製品生産額別ランキング

(2) 「不機嫌な時代」としての1920年代

- ① 欧米の市場への再登場
⇒ 高品質・低価格な鋼材などを輸出・供給
- ② アジアでの民族資本成長・中国での反日運動の高まり
⇒ 輸出不振に
- ③ 大戦景気下の過剰投資
⇒ 戦後恐慌で不良債権化・負債の蓄積
- ④ 銀行の高金利・貸し渋り ⇒ 資金不足
- ⑤ 生産性の悪さ ⇒ 旧式の施設・労働集約型

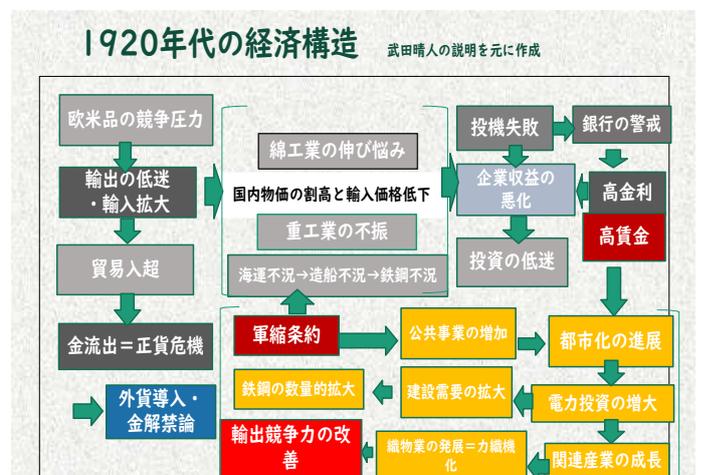
(3) 総需要のグラフから見える1920年代

- ① 総需要の伸びを支える個人消費
- ② 貿易も1920年代後期になって持ち直す

(4) 1920年代の「成長」～現代日本の原型形成

企業経営などは「停滞」も目立つが個人消費消費の伸びに支えられる

- ① 大戦景気にはじまる社会の大きな変化の継続
⇒ 産業 → 社会構造 → ライフスタイルの変化
- ② 農業社会 → 都市中心へ（人口の都市への移動）
- ③ 軽工業（製糸・綿紡績）から、重化学工業へ
- ④ エネルギー革命（蒸気 → 電力）
- ⑤ 労働者階級の大量出現（男子熟練工中心に）
- ⑥ サラリーマン、知識層の広がり
← 背景にある中・高等教育の普及
- ⑦ ライフスタイルの変化
= 大衆社会化・アメリカ化



11, 1920年代の経済構造（武田晴人による）